
想いを抱きしめて

灯夜

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

想いを抱きしめて

【Nコード】

N4247B

【作者名】

灯夜

【あらすじ】

主人公は、恋人と過ごす日々に流されているだけだった。些細なすれ違いから表面化した問題と、彼女の心、その中で見付ける想い。

想いを抱きしめて

ただ流れていく日々、それが今まで当たり前だった。
彼女の告白から始まった恋愛。

僕は、悩む事も考える必要も無かった。
だって。

断る理由が無かった、それが始まりだったのだから。

年が明けても増してゆく寒さは、吹き抜ける風に痛い程の冷気を
含ませる。

「寒いねー」

彩が話した言葉が微かに白い、遅い時間ではないのに夜の帳が下
りていた。

寒々とした夜空、繋いでいる手からじんわりと体温が伝わる。

「けど冬は好き！ 寒いのも結構好きだし、雪とか風流で良いよね」

「うん」

そう答えても、好き嫌いとは別に寒いものは寒いので、僕は首を
縮めてマフラーに口元まで埋める。

変わらずに元気な彼女は、本当に冬が好きなんだと思う。

（繋いでいる手だって、僕と比べ物にならないほど暖かいし）

「それに、やっぱり買い食い食いの醍醐味は寒い季節に温かいモノだよ。

最近是一年中だけど、コンビニの肉まんとかは、今の季節だけで良
いと思わない？」

「うーん」

少し唸ってから、微妙な表情を返す。

（一年中あったんだ、あれ）

僕は、冬季限定なのだと思っていた。

「今年は降らないのかなあ」

首を傾げたり笑ったり、喋りながらも変わっていく彼女の表情は豊かで、可愛いと思う。

冷え込む割には雪の少ないこの地方、だけど一月になっても一回も降らないのは珍しい。

「そうだね」

空を見上げながら、僕は答えた。

冷えた大気は澄み渡り星が輝く、雪をもたらす事の出来そうな雲は無さそうだ。

「そうだね、じゃないよ！ だってクリスマスにも降らなかったんだよ？」

彩はやれやれといった顔をして、繋いでいない方の手で、大げさに目を覆って一気に喋りだす。

僕は曖昧な笑顔を浮かべたまま、流れていく声を少しだけ耳に残し、空に消えていく白い吐息の行方を目で追っていた。

彼女と付き合ってから、もうじき一年が過ぎようとしている。そういえば、彩が想いを打ち明けたのは、雪の日だった。

(だから、余計にこだわっているのかな)

「うん……？」

手を引かれて振り返ると、膨れっ面で彩が拗ねていた。

「気の無い返事、ちゃんと聞いているの？」

僕は僅かに笑ってから、誤魔化す様にそっと頬に口付ける。

彩の事は嫌いじゃない。

けれど付き合っている今も、好きなのか分からない。

ただ甘えているだけなのかもしれない。

甘美な愛されるという事に。

「そろそろテストだね、勉強してる？」

機嫌を直してくれたのか、上目遣いでちょっと微笑んで彼女は言った。

「それなりには」

僕がさらりと答えると、さっきまでの笑みが凍りついた。

「そっか、いやー、私なんて進級できるかも不安で不安で」

その凍りついた笑顔のまま、妙な迫力と共に僕の肩をバンバン叩く。

「大丈夫なの？」

咳き込みそうになりながら、何とか答える。

手加減って物を、考えて欲しい。

「平気平気、それより帰り息抜きにどっか寄らない？」

彩は、表情を柔らかくしてからそう言った。

いつもの事だけど、それは息抜きじゃなくて、現実逃避にしかない気がする。

正直、一週間後のテストを考えると乗り気じゃない。

「んー……」

多分難しい表情をしている僕を見て、彼女は言葉を付け足した。

「あ、勉強するかな？ 良いよ無理しないで」

彩がそんな事を言うのは、意外だった。

いつもなら、少し強引に引っ張っていくのに。

こんな日もあるぞ。

その日は、特に気にも留めずに、そう自分の中で結論付けていた。

そして次の日。

「試験が終わったら、映画行こう」

学食で一緒に昼食を取っていると、彩は真顔でそう切り出した。

彼女が持っているピラには、銃を構える軍人の姿がある。

普通は恋人と見るのは、恋愛なのかもしれないけど、僕らはこういうのが多い。

(そういえば、一緒に恋愛映画を見た事が無かったな)

「今度は何の影響？」

僕はそう答えながら、訝しげな表情で、彩が目の前に押し付けて来たビラを読んだ。

それは最近CMで見かける戦争映画のビラで、駅前で配っていた気がする。

「あー、昨日テレビで特集組んでいたよね」

凶星を突かれた彼女は、少し頬を赤らめながら言葉を荒げる。

「悪いのー！」

(照れる事無いのに)

「ゼーぜん、それでいつ行くの？」

わざと、少しだけおどけて僕は答えた。

「試験の終わる金曜の夜の部は？確か値引きしてたし」

喜々として言った彼女の期待を裏切りたくは無いのだけど、部活が入ってしまったている、間に合うかは微妙なラインだ。

「試験が終わったらすぐ部活だよ、土曜日の午後は駄目かな？」

「その時間は私が部活、じゃあまた今度で良いよ」

文化部の僕と運動部の彼女では、部活の活動時間は中々合わない。そんな事は結構あるのだけど、今日の彩は短くそう答えて俯いた。途端に減った口数、かなり怒っているみたい。

フオローしようにも、その努力は空回り。

気まぐれに口に運ぶご飯は鉛みたいで、重苦しくも苦い時間が過ぎていった。

それから彩のお誘いは無かったのだけど、試験が始まった事を理由に、僕は仲直りの努力を放棄していた。

けれど学校なんて狭い範囲は、注意した所で簡単に二人を引き合わせる。

聞きなれた声が入ってくる。

「試験範囲、マジで広い！」

「そもそも、読んどけーとかだけで、進んだ事にしちゃってるしね

「高校留年とか洒落にならないよ？」
視線を巡らすと、下駄箱前のホールの階段側で、彩はクラスメイ
トと談笑していた。
お互いに気が付いている距離、一瞬だけ合わさった瞳、飲み込ん
だ言葉。

「だけど、僕には踏み出せない一歩。
臆病だから？」

「それもあるかもしれない、いつも僕は理由を盾に逃げている。
けど、理由に逃げる本心は？
わからない。」

結局、今日も上手く噛み合わない空気を引き摺って、解決の糸口
が見えないまま時間だけが過ぎていく。

「一緒に帰る」

疑問文でも、半疑問文でもないお誘いは、随分と久しぶりの気が
する。

帰り道では、ずっと嬉しそうな彩に、僕は少なからず疑問が浮か
んでいた。

「けれど、その反面冷めた自分が心の中でささやく。」

「覚悟はしておくべきだと。」

「元々、一緒に居る事が目的の会話に、意味なんて無い。」

「些細な話に笑ったり、相槌を打ったり。」

「そんないつもの二人を過ごしてから、彼女は告げる。」

「この二週間」

「急に張り詰めていく空気、心が重い。」

「達也から誘ってくれるのを、待っていたって言ったらどうする？」

「(なんとなく、そんな気はしていたのだけれど……)」

「僕は答えに詰まって、気まずい沈黙が流れていく。」

そろそろ別れ道。

ブレザーの袖を引かれて、僕は振り返った。

真顔の彼女と真っ直ぐに合わされた視線、微かに潤んだその瞳に僕が映る。

「いいよ？ 別れても」

空気や雰囲気といったものから予想は出来ただけ、その理由が僕には分からない。

「待ってよ、今回の原因は映画の予定が上手く合わなくて」

「違う！」

僕の言葉を遮って、はっきりとそう言った彼女。

「違うよ」

声のトーンを落として、彩はもう一度繰り返した。

僕はどう答えて良いのか解らずに、ただ見詰め返すだけ。

それを察してくれたのか、彼女はゆっくりと口を開いた。

「私は、貴方の前では飾らない私で居られるから……：：：気に入られるように無理したりしないで、私が私として好きでいられたの」

彼女は、寂しそうな笑顔を浮かべて言葉を続ける。

「飾り立てて無理をした『好き』なんて、すぐ崩れるもの」

そこで言葉を一度区切ると、少しだけ目を閉じた。

「だから、貴方にも無理させたくない」

段々と弱くなっていく声。

「分かっただけだよ？ 貴方が流されているだけって事にも、なんとなくそうだと思っただけ、彼女の口から聞くのは辛い。

いつもの笑顔の下に、そんな想いを抱えさせていた事が、自責の念を駆り立てる。

「だから……：：：縛り付けるのはもうお終い、その上でもう一度考えて」

僕はどうなのだろう。

無理はしていないけれど、流されて合わせていただけという気がする。

じゃあ、飾らない気持ちとしては？

嫌いじゃない、それが正直な気持ちかもしれない。

続けて来たのは、別れたら辛いから。

それだけ？

彼女は言った、『考えて』と。

けれど、僕にはまだ自分そのものが分からない。

分からないのに、飾らない自分なんて見えはしない。

深く考えずに逃げていたのは、そこに確かな想いを見出せなかったからなのだろう。

それでも、過ごした時間の中に感じていた事。

楽しかった。

馬鹿やって騒いで笑い合った日も、あちこち引つ張り回されてヘトヘトになった日でさえ。

彼女と出会えた事によって生まれた、今の僕の飾らない本心がそれなら。

僕も、飾らずに好きを表現出来ると思うんだ。

まだ少しだけ、時間は掛かるかもしれないけど……。

「ありがとう」

多くの想いに幾つかの言葉が浮かんだけれど、何より先に伝えるのはこの言葉だと思った。

そして、僕は彼女の髪に手を伸ばす。

やっと見つけた想いを、彼女ごと抱きしめるために。

(後書き)

いかがでしたでしょうか？

コメントは次回以降に反映させて行くことと考えておりますので、何かありましたら宜しくお願いいたします。

想いを抱きしめて

想いを抱きしめて

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4247b/>

想いを抱きしめて

2008年11月7日08時02分発行